

正倉院年報

一 染織品の整理

昭和四八年度の染織品の整理は、前年度から継続していた一二七号櫃納在分の展開整理が六月をもって一応終了し、引き続き七月より一二八号櫃分の展開整理に取りかかり、現在統行中である。これらの染織品は前号年報で述べたとおり南倉所屬「幡類残欠百参拾八裏」中のもので、右の二合を含めた計六合の辛櫃に分納されている。なお前年同様、展開整理に際し、調査をも実施した。

またべつに中・南倉の諸辛櫃の古裂零片を整理して帖装古裂三冊を製作した。

以下に四八年度のそれら整理品目・員数と主たる特徴等を掲げる。

(一) 第一二七号櫃整理品

(1) 羅道場幡残欠 六旒また残片五片

聖武天皇一周忌齋会用の幡で、その形式は前号年報記載の類品と同様である。

(2) 黄純幡残片 一片

(3) 純幡脚残片 一点

赤純製の幡身下縁に萌黄と黄純の脚残片が付いている。幡身下縁の角部にはもと円板をとじつけた痕跡がある。法隆寺献納染織品中にこの種の金属円板飾を付けた幡があるから、本件も法隆寺系の混入品と考えられる。

(4) 綾幡脚残片 一点

双竜円文綾二条（No. 49^{註し}51）と葡萄唐草文綾一条（No. 82）の脚残片をとじあわせている。綾はみな平地綾でその文様も法隆寺献納染織品中にしばしば見えるものである。これも法隆寺系の混入品であろう。

(5) 雑色綾純幡脚状裂 八九条

白・黄・赤・紫・縹・緑など諸色の純および綾製带状裂で、その多くは幡類の脚であったと思われる。巾は一〇センチ強から二〇数センチまで区々で、大部分は上下端を欠失しているが、下端部を留めるものが若干あり、その形は横一文字に切るものと、剣先形、撫角形の三種に分かれる。綾は八稜唐花文綾地綾（No. 69）が一条と、他はすべて法隆寺系に多い菱・亀甲・山形・格子・メダリヨンなどの諸系統の平地綾である。

(6) 花 鬘 四点

それぞれ来纈や藤纈の純・羅で作る。四点上一点は比較的保存状態が良くて、葛の芯の輪形や垂飾などの原状をおよそ推察することができ。他の三点は残片である。

(7) 子日目利箒・手辛鋤机褥帯残片 三条

どれも緑純製四つ折の平紐で、上下欠失。各条に「□鋤褥帯天平寶
□年正月」「子日目利箒机褥天平寶字二年正月」「子日目利箒机褥帯天平寶
字二年正月」と、それぞれ墨書がある。目利箒の机褥、机覆、机覆帯は
すでに発見されているが、机褥帯はこれが初見である。^(註2)

(8) 紫綾天蓋垂飾残片 二片

(9) 紫綾錦縁帶狀裂残片 一三条

(10) 雑色綾純紐残片 三七条

(11) 使途不明黄綾 一片

ちなみに、去る昭和四四年から四八年六月にかけて展開整理した元一
二七号櫃納在染織品の総内訳はつぎのとおり。

錦羅道場幡一〇三旒また五九片・大灌頂幡各部残片一九片・その他の各
種幡類九旒また二〇六片・各種衣服類残片二二片・天蓋残片六片・花鬘
四点・袋残片一片・各種紐帶類八九条・使途不明品一七片

(二) 第二二八号櫃整理品

(1) 錦道場幡残欠 一一旒また残片二二片

(2) 羅道場幡残欠 一三旒また残片五片

(3) 錦五坪道場幡残欠 四旒

右三件はすべて聖武天皇一周忌齋会用のもので、形状・錦文などは前
号年報に報告した類品と大差がない。このうち羅道場幡一旒の頭縁の下
貼り純に「天平勝寶八歳十月□」の墨書が見出された。調純の年記であ
ろう。

(4) 道場幡垂端飾 一二枚

錦・羅道場幡の脚の下端に付く錦製裁文の分離したもので、その錦文
はNo. 20B 40 64 87 93 および 77B 系に類する唐花文の^(註3)、各種にわたっている。

(5) 大灌頂幡各部残片 一八片

これも聖武天皇一周忌齋会用で、一八片中一片は幡身残片、他はすべ
て綾製の垂脚残片である。綾文はNo. 61 65 70 83 84 88 89 92 93 である。垂脚残
片中の一条は、地裂の一方の端がやや内寄り方向に斜に裁たれている
(図版1)。その理由は不明だが、この切込み部はたぶん脚の上端に近
い部分であって、数条の脚を身の下縁に挿し込むとき、脚の重なりによ
って縁が盛り上がるのを緩和するためではないかと私考する。

(6) 白綾幡頭残片 一片(図版2)

No. 89の白綾製で芯は赤純。頭から下がる垂条の裏に「天平勝寶四年四
月□」と墨書があり、大仏開眼会の用品と思われる。頭縁が下へ長く伸
び、細かい装飾を施さない点は、法隆寺系幡類に近い形式だが、頭頂の
開き角度はかなりひろくなっている。

(7) 紫綾幡吊紐狀裂残片 一片

紫綾製平紐で、「東大寺堂上階幡」身長□尺 長□尺 廣一尺□寸 天平勝寶四年四

月九日」と、やはり大仏開眼会当日の年記墨書がある。紐の一端に別な黄綾細紐残片を結びつけているが、綾文は共に不明。

(8) 房付綾幡残欠 二旒また残片一片

頭は錦、身と脚は綾で、頭・身の両側・脚端にそれぞれ色染糸房を飾る。

(9) 綾幡残欠 一旒

綾製幡の身部の残欠だが、房を付けた形跡がないから、前者とは別種であろう。

(10) 房付薄繩幡残片 二片

頭は錦、身は薄繩で、脚は逸している。頭と身の縁に(8)と同様な房を付ける。

(11) 夾纈羅幡残欠 一旒

頭・脚を逸す。身は纈二枚を芯とし両面に夾纈羅を貼り、紫綾で縁取る。

(12) 崑崙衣服残片 一片

大破しているが半臂の残片らしい。浅緑地鹿唐花文錦(No.103)の衽(おくみ)と前身頃ふうの断片に夾纈と絞り染の纈および錦製白纈裏の紐が結び付けてある。紐の裏裂に「後幌論」と墨書がある。すなわち大仏開眼会時の伎楽崑崙の用物である。

(13) 錦 襪 一隻

紫地経錦の表、布芯。浅型。錦は大破。

(14) 天蓋残片 二片

(15) 錦垂幕状裂 一枚

(16) 紫綾錦縁带状裂残片 三条

(17) その他の各種紐帯類残片 七条

(18) 使途不明錦継分裂残片 五片

(19) 使途不明綾縄継分裂残片 一片

(20) 綾縄残片 三片

(三) 帖装古裂

(1) 七四九号 一冊 羅道場幡花形裁文残片九九片を貼る(中倉81 83 86

89 90、南倉126の各号辛櫃のもの)。

(2) 七五〇号 一冊 羅道場幡坪界部残片八六片を貼る(中倉83号辛櫃のもの)。

(3) 七五一号 一冊 縞文薄絹五一七片を貼る(中倉83号辛櫃のもの)。

註1 本誌一二号所載「正倉院の綾」の図版番号。以下綾文の下に付けるナンバーは、すべてこれに準じる。

註2 本誌三号所載「正倉院古裂銘文集成」(結)の第六項参照。

註3 本誌一三号所載「正倉院の錦」の図版番号。以下錦文の下に付けるナンバーは、すべてこれに準じる。

(松本包夫)

二 皮革品の修理

一、革帯三条（一、二、四号）、南一四一
一、履三隻（五、一三、一四号）、南一四三

共に修理前の姿は前年度のものとはほぼ同様で、いずれも変形している形態を整形し、縫糸が朽損し破綻した部分は、革をあてるかそのままで樹脂にて接着す。主なる特徴は左のとおりである。

革帯一号 帯革は二本を継いで一条となす。鉈尾及び巡方二個を欠失する。欠失した金具は「南一四一 革帯残欠」中より法量、品質、形状のあうものを選出して補う。巡方・丸柄の取付け位置と個数は先端方より、丸・巡・巡・丸（六個続く）・巡・巡・丸の一二個である。修理後全長一六九・八糎

革帯二号 三本を継いで一条となす。鉈具の環及び刺鉄を欠失す。巡方・丸柄の取付け位置と個数は右一号と同じ。修理後全長一四九・八糎
革帯四号 二本を継いで一条となす。巡方二個、丸柄一個及び鉈尾を欠失するが、「南一四一」より選出取付く。巡方・丸柄の取付け位置と個数は右一号と同じ。修理後全長一五四・三糎

履五号 心の麻布は二枚、表面の唐草文は僅かに存す。底裏に泥付着す。履内底に墨書あり「十四 廿八日」「上野老万呂」。内敷は逸失す。

履一三号 心布は一枚、表面の唐草文は僅かに存す。底裏に泥付着す。履内底に墨書あり「廿九日 中 秦息嶋」。内敷は逸失す。

履一四号 心布は二枚、表面の唐草文はみえず。底裏に泥付着す。履内底に墨書あり「園部根万呂 丁十五」。内敷表面の麻布破損甚し、表面に墨書あり「五」。
（関根真隆）

三 経巻の修理・調査

（一）修理

昭和四八年度における聖語藏経巻の修理は、前年度に引き続き、乙種写経三〇巻と宋版経九帖とを完了した。聖語藏経巻目録（昭和五年奈良帝室博物館発行）による内訳は次の通りである。

乙写一〇八号正法念處経巻四から巻四三まで三〇巻。

宋版五号大方広仏華嚴経巻三一、三三（甲）、三四、三五、三六（甲）、三六（乙）、三七、三八、三九（甲）の九帖。

乙写の正法念處経三〇巻は卷子装で、標は褐色紙、本紙は白紙、軸は黒漆塗棒型朱頂割軸、標には麻もしくは絹の経紐を具している。また巻二一から二六、及び巻二八、二九の八巻は同筆であり、しかもそのうち巻二五には次の奥書がある。

「仁安三年八月三日卯刻一校了」
従って少なくともこれら八巻は平安末頃の書写であることがわかる。

宋版の大方広仏華嚴經九帖は折本装で、標・本紙ともに褐色紙、尾題のあとに字解があり、巻末見返しに「祖師」と題した版面がある。「紹興二年」（南宋、西暦一一三二年）の刊記を有する四号大方等大集經卷三〇とよく似ているので、いずれも南宋版と認められる。

乙写、宋版とも修理に際しては、それぞれ旧態を損じないよう虫損破損の個所を補修し、標あるいは軸（乙写）を逸失せるものは僚巻に倣って新補した。また宋版経は破損が甚しいためすべて総裏打を施した。なお宋版五号大方広仏華嚴經卷三六（乙）は、修理に際し実は卷二六であることが判明したので、そのように経巻目録の記載を訂正する。

(二) 調査

前号に引き続き、修理済乙種写経の銘識のうち本誌に未掲載のものを、調査書によって次に掲げる。

一五号大方広仏華嚴經卷四九（六十華嚴）

「康永二年五月十日^{〔読み〕}或人書写之早^{〔同カ〕} 華嚴宗権律師覺聖^{〔同カ〕} 同年月十二日一交了」 軸墨書「後生為^{〔同カ〕}成」

同卷五〇（六十華嚴）（図版3）

「康永二年六月廿二日午時於東大寺鼓^{〔坂カ〕}□以尊勝院之經藏之雙紙經開老眼書写之早是偏以此功篤金剛種子遂為證入果海也兼又為弘法興隆令法久住之矣 右筆花嚴宗権律師覺聖^{〔同カ〕} 同年月日於同處一交了」

同卷五四・五五（六十華嚴）

「貞治^丁 未 林鐘日結縁比丘源珠大旦那傳智」 「一交了」

同卷五九（六十華嚴）

「貞治^丁 未 夷則日結縁比丘源珠大旦那傳智敬白」 「一交了」

同卷六〇大方広仏華嚴經統入法界品（図版4）

「文永二年素秋之比書写之畢依東大寺尊勝院法印宗性之誂也 執筆大律師頼尊 同七年六月十一日^未 時於東大寺尊勝院一校畢依僧正御房之仰也 僧宗成 同日奉納經藏畢」

同卷六七（八十華嚴）（図版5）

「一交了」 「貞永元年十一月六日^子 時於笠置寺福成院房合疏奉讀之畢依為當年本宗三十講當處故雖奉讀之願望偏為往生兜 之内院值遇龍花之出世矣 花嚴宗末学大法印宗性」

同卷六八（八十華嚴）

「貞永元年十一月七日^酉 時」 以下卷六七の銘識と同文。

（柳雄太郎）

四 刀剣類の研磨

第二次刀剣類研磨計画第七年度として本年度に研磨を了したものは次のとおりである。

手鉾五号は刀身に大きい屈曲のあるもので、武用というより見せる面に重点をおいて作られたもののようである。十合鞘刀子は『献物帳』所載のもので、その第一〇号は鉈（やりがんな）である。後記の如く本年

名称・号数	全長 cm	刃長 cm	重量 g	備考
無莊刀第四一号	五九・二	四七・二	一一一七・五五	反り〇・二糎
手鉾第五号	七二・六	三八	六六五・〇	
鉾第三一号	二九	一三・三	二二七・〇	
十合鞘刀子第五号	一四・八	九・五	九・七	
十合鞘刀子第六号	一四・二	六・八	一三・一弱	
十合鞘刀子第一〇号	一一・六	四弱	九・六	
刀子第七号の一	一三・〇	八・〇	六・五強	
刀子第一五号の一	一五弱	八・八	一二・二	

度は正倉院の刀剣類の調査報告書を出版して全品目の図版を収録し、一部押形も入れたので、それらを参照されたい。
(関根真隆)

五 宝物の模造

本年度は中倉納物の漆挾軾と南倉納物の甘竹簫の二点を対象として模造を行った。

前者は、木製黒漆塗りの肱つきで、その形態は漢代の画像や唐代の壁画にみるにとどまり、我国に於ては、後世の脇息の前身をなす貴重な遺品である。尚その塗漆技巧については塗りっぱなしによる仕上げにもかかわらず、埃や刷毛目等の障害を何処にも残さない極めて優秀な作例

で、奈良朝髹漆品を代表するものといつて過言ではない。

後者は、明治時代に誤った修理をうけ、現在十二管簫と残欠の二口に分断されたままとなっているもので、近年行われた楽器調査の結果『東大寺献物帳』記載の十八管簫であることが明らかにされたものである。つまり十八本の竹管を並列に並べ木製枠に納めた管楽器である。なお、竹管は虫損などにより可成り朽弱しており、模造の急務が叫ばれていたものでもある。模造の報告を行うに当って若干の説明を加える。

〔漆挾軾〕

先ず、この宝物は甲板一枚、脚一双、脚座一双よりなり、各々の接合は、脚の上下端に作り出した柄と、甲板と脚座に穿たれた柄孔との結合による柄組みで、釘などの使用はない。

素地はX線透過写真によれば檜材と推定され、甲板は垂直方向に対して約20度の傾斜をもつ桎材を、脚は四方桎に木取りした角柱を各二本宛甲板の両端近くに植え立て、脚座は桎目の同材で、恰も二枚の板を上下に重ね合せた如くに一本より削り出したもので、各二本の脚を受けている。

塗漆は、極く薄い下地の上に墨漆による中塗りを行い、現在は明褐色を呈する上塗りが施されたものである。甲板裏面には東大寺の刻銘があり朱が填められている。

〔甘竹簫〕

この宝物は、本来十八本の竹管と二箇の縁木(桎木)、二枚の帯板及び

紙礫からなるものであり、漢の応劭の『風俗通義』に鳳の翼を象って作るとある様に竹管を恰も鳥の翼の様に並べ、縁木と帯で止めつけたものである。各竹管は一節のものを貫通させ、根に近い方を上にして上端は山形に並べ、その前後を斜めに切り落し吹口としている。竹管内には音律調整用の紙の詰物がしてある。

現在は淡竹製旧管十六管と両縁木及び片面の帯（いずれもトネリコ属のヤチダモ材、一名タモ）が存しており、竹管二本と片面の帯は欠失している。なお、竹管内に紙礫を残すものが十管あるが、旧位置を保つものはなさそうであると楽器調査では報告されている。

昭和四八年度に模造対象としたものの概要は以上のとおりである。

さてこれらを模造するに当っては、復原模造の基本方針に則り、漆挾軾の場合は同質の檜材を、出来るだけ宝物に合せて木取り、各部の接合も宝物のそれと同じ方法によった。又、塗漆に当っては先ず、その漆は純国産の良質のものを「くろめ」「なやし」等の工程を経て、掃墨を入れた墨漆、上塗用の花漆を精製し、これを用いた。次に下地は極く薄く、中塗上塗も出来るだけ宝物のそれに合せた。なお、上塗は塗りっぱなしによる極めて注意を要する困難な作業であった。素地製作は坂本曲斉氏に、塗漆は北村大通氏に依頼した。なお刻銘には坂本氏が当った。

次に甘竹簫は、その竹の材質判定のために京大名誉教授上田弘一郎氏や同元講師伊佐義朗氏等に調査鑑定を依頼し、ハチク材であることがつきとめられた。次に縁木や帯については、正倉院木工調査員竹内碧外氏

や楽器師佐竹藤三郎氏他多くの方々の意見を聞き、又科学的な立場からは元奈良教育大学教授理学博士島倉巳三郎氏等の御協力を得て、従来から沢栗と称されてきたものがトネリコ属のヤチダモ材であることが明らかにされた。これらの材料を用いて宝物に忠実に、又欠失部については楽器調査等の結果に基づいて補足復元した。なお、各部の接合には膠を用いた。

製作は坂本曲斉氏に依頼し、又楽器調査員林謙三氏が必要に応じ指導した。

実技者に対しては模造仕様書と模造図面に基つき指示を行なうとともに、X線写真を含む資料類を参照させ、また担当職員立合いのもとに正倉院事務所において宝物と照合させた。（木村法光）

六 秋季定例開封

昭和四八年度の定例開封行事は、一〇月二日から十一月二〇日まで、四〇日間にわたって行なわれた。その間の行事、事業の主なるものは次のとおりであった。

(一) 開、閉封の儀

一〇月一二日午前一〇時より西宝庫各倉の勅封を順次取り解き、松平潔侍従は後藤四郎正倉院事務所長の先導で倉内を巡検、無事を確認した。また同日東宝庫内の聖語藏経巻収納戸棚の宮内庁長官封を解いた。

一月二〇日午前一〇時より杉原正純侍従は後藤正倉院事務所長の先導により西宝庫各倉を巡検し、引続き直ちに勅封が施された。また同日、東宝庫内の聖語藏経巻収納戸棚に宮内庁長官封が施された。

なお、開閉封とも奈良国立博物館、東大寺等より来賓の参列を得た。

(二) 宝物、宝庫の点検、手入等

開封期間中は、天候不良の日を除き、所定の日程表に従って宝物を点検、防虫剤を交換、空調関係機械類を点検するとともに、刀剣類の油曳き手入れを行なった。刀剣類の手入れには東京国立博物館刀剣室長加島進氏を委嘱した。

(三) 宝物の特別調査

(1) 木工品調査

今年度は、昨昭和四七年度からはじめられた木工品調査の第二年度である。今年は、指物類のうち箱ものを中心に、合子等の挽物・刳物類、或は折櫃等の曲物類について計七四点の調査を行った。その品目は次の通りである。

(北倉納物) 碁局龕一合、八角楯箱一合、赤漆八角小櫃一合、赤漆六角小櫃一合、細長櫃一合、棚厨子二枚、黒漆槻葉合子一合、槻葉合子二合、檜葉合子二合。

(中倉納物) 沈香末塗経筒一合、仮斑竹箱一合、赤漆櫨木小櫃一合、黒柿蘇芳染小櫃一合、漆小櫃一合、沈香木畫箱三合、密陀彩絵箱二合、紫檀小櫃一合、紫檀木畫箱二合、瑤瑠螺鈿八角箱一合、檳榔木畫箱一

合、朽木菱形木畫箱一合、金銀絵木理箱一合、碧地金銀絵箱二合、蘇芳地金銀絵箱三合、蘇芳地彩絵箱一合、黄楊木金銀絵箱一合、緑地彩絵箱一合、黒柿蘇芳染金銀山水絵箱一合、粉地彩絵箱一合、榎桶箱一合、籠箱三合、夾纈純箱一合、檜方几一枚、檜金銀絵経筒一合、金銀絵碁子合子二合、曲物残欠三点、折櫃残欠二点。

(南倉納物) 漆塵尾箱一合、漆如意箱一合、素木如意箱一合、黒柿蘇芳染金銀絵如意箱一合、漆錫杖箱一合、八角高麗錦箱一合、六角楯箱一合、朴木金銀絵琴箱一合、粉地彩絵倚几二枚、朴木粉絵高坏一枚、檜合子(身)一口、刻彫梧桐金銀絵花形合子五点、古櫃四合。

調査は「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」の唐木技法技術者竹内碧外、重要無形文化財保持者氷見晃堂、元奈良教育大学教授島倉已三郎、東京国立博物館法隆寺宝物室長木内武男の四氏に依嘱して行った。

(2) その他

右のほか模造製作上の資料を得るため紅・緑牙撥鏤尺、粉地彩絵八角几等、染色、彩色ある宝物を調査し、また伎楽面の現状維持修理の技術上の問題を明かにするため、調査を行った。調査には夫々の分野の専門学者、実技者を委嘱した。

また東京大学史料編纂所員の正倉院古文書調査、東大寺図書館員の聖語藏経巻調査があった。

(四) 宝物の出陳

宝庫の開封に際し、北倉納物平螺鈿背八角鏡第十三号以下六七点の宝物、経巻が奈良国立博物館に出陳、正倉院展として一〇月二八日から一月一日まで一般公開された。

またこれとは別に、東京国立博物館における特別展「日本の染織」には、会期の初めと終りに夫々五点、計十点の染織品が出陳された。

(四) 正倉院展講座

一月四日、奈良国立博物館における公開講演会に、木村法光技官が出講し、「正倉院の漆工」と題して講演を行なった。要旨は次のとおり。

(阿部 弘)

「正倉院の漆工」

奈良時代の工芸、或は漆芸の位置づけを述べ、次に今回正倉院展出陳中の漆芸品二拾数点中より密陀彩絵箱・漆挾軾(以上指物)、香印押型盤・黒漆塗平盆(以上挽物)、漆花形箱・漆四合香箱(以上曲物)、漆胡樽・漆花形皿(以上刳物)、の八点を選び出し、これらのX線透過写真スライドを交え、その素材や素地加工等塗漆以前の或は布着せ等の下地施工の問題を中心に、これらを製作した古人の態度なり技術なりをとりあげて講演。

漆芸素地として最も多くを占める木胎のものの特色を述べ全体的傾向をながめてみた。

まず指物素地のものは、檜様の柁目材の利用が多く、布着せされているものは少ない。又漆芸品の全てについていい得ることであるが下地が

薄いことも特色である。次に挽物素地のものは、全体的には広葉樹のものが多く、ここにとりあげた二点は例外的に檜様針葉樹である。その木取りは木口・柁目・板目等様々であり、布着せの布は細く、一平方糎中経糸17本以上の織密度のものが挽物中の88%も占めている。曲物素地は変形箱物・合子類で、その素材は針葉樹。平面部には柁目を、曲面部には板目を用いている。布の織密度は一平方糎中経糸が12~15本の程度のもものが最も多く、曲物中の83%を占めている。なお合子類の素地に狂いの少ない曲物技法がとられているのは大きな特色である。刳物素地のものは複雑な構造を示すもので、桂や桐等の広葉樹散孔材が用いられ、その木取りや布着せについては一定しない。

以上のごとく、全てのものに布着せされているわけではない。素地割れの生じ易いものには細い布を着せ、下地は出来るだけ薄く実用に耐え得る様に、又素材や技法の選別も、実に合理的に行われている。

(木村法光)

七 保存科学的調査

例年どおり、金属板表面生成物調査を実施した。本調査は、正倉院の東西両宝庫の空気調和の効果を確認し、あるいは、万一の汚染の早期発見を期するためのものであり、神戸大学工学部の永田三郎教授に依頼した。

以下に、調査方法並びに調査結果の概要を記す。

調査は、宝庫内外一一箇所に暴露した金属試料の腐食の進み具合を、種々の物理的方法により研究したものであり、調査期間は昭和四七年秋より翌四八年秋までの約一年間、試料は、次の二形態のものであった。一つは表面研磨した銀、銅、鉄の三種の金属板、もう一つは、厚さ約六百Å（一〇万分の六ミリメートル）の銀、銅、鉄の真空蒸着膜。調査方法は次の六方法であった。(1)表面色の観察、(2)反射率の測定、(3)偏光解析による表面生成物の膜厚測定、(4)反射電子回折、(5)透過電子回折、(6)電子顕微鏡観察、このうち、(5)、(6)の方法は、今回新たに採用したものである。

一年間配置した後の金属板の表面色は、銀板・淡黄色く淡褐色、銅板・褐色く紫褐色、鉄板・一般にきれい、で大差はなかった。反射率比は、銀、銅、鉄とも、冬期、夏期の低下が幾分大きい、特に異常な低下はみられなかった。表面生成物の膜厚の一年間の経時変化や一年後の増加は、反射率比の減少と同様の傾向を示している。一年後の膜厚は、銀は数十Å以下、銅は数十〜二百Å程度であった。反射及び透過電子回折では、殆んどすべての銀、銅板から硫化物が検出され、又、いくつかの試料には、他の化合物の混在も認められた。電子顕微鏡像では、試料に多数の腐食孔が存在するように観察された。

以上、極めて鋭敏な方法による調査の結果であり、全体としては汚染の程度は小さく、空気調和の状態も良好であることが確認できた。

なお、より完全な空気浄化を行なうために、ここ数年間の調査結果に基づき、西宝庫空気調和装置の還気ダクト中に活性炭フィルターを新設した。

(永嶋正春)

八 調査報告書の刊行

正倉院には著名な金銀銅唐大刀をはじめとして、大刀・刀五五口、手鉾五口、鉾三三口、刀子類八七口（錯二口、鋸一口、鉈三口、鑽刀子一口、明治年間補作の刀子六口等を含む）が、きわめて完好な状態で伝存している。

これらの刀身の調査を昭和四十一年から四十三年にかけて本間順治、佐藤貫一、加島進、岩崎航介・同重義の各氏によって実施し、その結果をこのたび『正倉院の刀剣』（日本経済新聞社発行）として公刊した。本書は、用鋼の質と鍛錬、造込、地文、刃文、茎の仕立と符牒銘、孔などの各項目について述べられている。まずその作風はこれまでも指摘されたことであるが、中世以後の大和物に通じること、地がねが後世のものに比べて柔らかいこと、刀匠の意見では大刀は十回内外の折返し鍛錬が行われているということ、造込は直刀で、平造、切刃造、鑄造、鋒両刃造の四種類があるが、切刃造が多いこと、地文は柃目ばかりのものはなく、板目と柃目が交るものと、さらに流れ肌が交るものが多いこと、刃文は大部分が直刃で、大半が細直刃で、少数の中直刃と糸直刃が

あること、また銘を切ったものは一口もないが、何らかの符牒とおもわれるものを切りつけたのが少数存在することなどが明らかにされた。なお附篇の「金属顕微鏡による調査」は、従来にも数少ない刀剣の科学的研究とも称すべき、きわめてユニークな論考である。

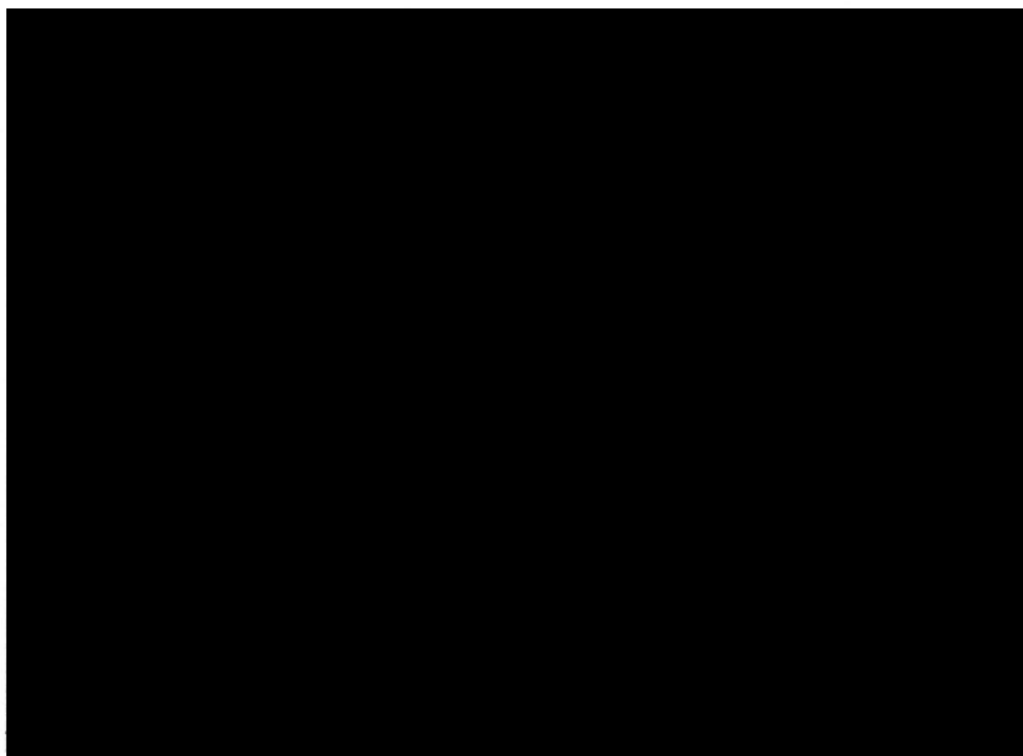
(関根真隆)

図版 1
大灌頂幡垂脚



図版 2
白綾幡頭

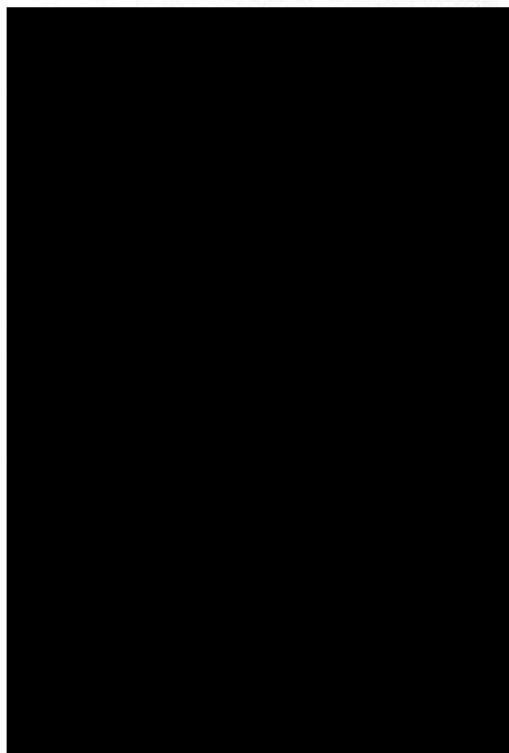




図版 3 大方広仏華嚴經 卷50 卷末



図版 5 大方広仏華嚴經 卷67 卷末



図版 4 大方広仏華嚴經 卷60 卷末